



川崎 明徳 学園長
川崎学園第二代理事長

戦前・戦中の川崎病院

ヒストリア〔1〕『2月22日』
(2月号掲載)でご紹介した写真について、川崎明徳学園長にお話をうかがいました。

「最初の外科川崎病院は、現在の附属川崎病院の道路を隔てて斜め前で、閉院して空いていた武藤小児科病院を借りて昭和14年に開院しました。」

広い敷地内に、入院の棟、外来の棟、その後ろに住まいがあって、私たちはそこに住んでいました。当時から『年中無休・昼夜診療』を掲げていて、最初、医師は父(祐宣)一人で、朝出て行って夜戻る、夜中も救急、往診に行くという状態でした。私はかなりヤンチャだったようで、しょっちゅう父に叱られていきました。

昭和16年には隣の福武病院(出征して空家)も借りて病院を拡張、宮崎から前田副院長が看護師を連れて応援に来てくれていました。病院の評判もよく、また当時は召集されて医師も少なく、閉める医院も多くて、患者さんは増え

る一方でした。受付窓口には、『医療費にお困りの方は御遠慮なくお申し出ください』と貼り出してありました。

昭和18年に病院はまるごと臨時海軍病院に徵用さ

れ、祐宣院長は現地徵用で海軍軍医に任官しました。昭和20年になると前田副院長が召集され、祐宣院長も6月19日から7月20日まで戸塚の海軍病院へ徵集されていて、岡山大空襲で病院が全焼した時は不在でした。

この写真は福武病院の屋上で、天満屋が後ろに見えます。昭和17年、私が深祇小学校3年生の頃の写真だと思います。」



前列向かって一番左が川崎明徳学園長二人おいて川崎祐宣院長、前田秀雄副院長

※ヒストリア〔1〕について、附属川崎病院 秋定副院長から次の感想をいただきました。

「川崎祐宣先生が京都大学に合格されていたり、津田外科教室に入局されなかつたら、今の私もここにいないんだ、不思議だなあと感激いたしました。川崎学園創設の歴史として大変意味深いお話を。1968年の川崎病院30周年記念式典の挨拶からということで、学園の皆さんほどご存じない真実だと思います。今後のコラムを楽しみにしています。」